

鹿苑寺参拝通路整備事業について

副主任研究員 細谷 豪

1. はじめに

鹿苑寺は、京都市北区にある臨済宗相国寺派の山外塔頭の一つで、舍利殿「金閣」が有名であるため、通称・金閣寺と呼ばれている。鎌倉時代の西園寺公経(1171-1244)の別荘・北山第を室町幕府三代将軍足利義満(1358-1408)が譲り受けて北山殿を営み、義満の死後、法号の鹿苑院殿の名を冠して、夢窓国師を開山とした寺院となったのが始まりとされる。

現在の鹿苑寺は、鹿苑寺(金閣寺)庭園として特別史跡及び特別名勝に指定されており、また世界文化遺産「古都京都の文化財」の構成要素でもある。京都でも有数の観光名所として1日に最大で万人規模の参拝者が訪れるが、近年、外国人の参拝者の増加により、参拝者の混雑や参拝マナーの悪化がより深刻化してきており、寺では専門の職員を配置する等、対応に苦慮してきた。そうした状況を改善し、券売所から入口の参拝門までの間を参拝者のエントランスとして、より良い環境にするため、参拝通路を整備する計画があり、当協会が設計監理の依頼を受けた。

敷地の性格から、計画上の制約も多いため、工事前の発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、その調査結果を基に行政と協議の上、計画範囲を決定した。また、当然のことであるが、京都市及び京都府の文化財保護課の指導・助言の下、特別史跡及び特別名勝の現状変更をはじめ、開発許可不要、古都保存、風致、建築確認等の所定の申請手続きを取りながら進めた。

2. 事業概要

参拝通路整備事業は、大きく分けて下記の3つの工事に分けて行った。

鹿苑寺は年中無休で参観を受け入れており、他に迂回路もないため、参拝客を通しながらの工事となった。参拝者の安全を十分確保し、工程を工夫しながら、適宜、仮設の参拝通路を設けることで対応した。

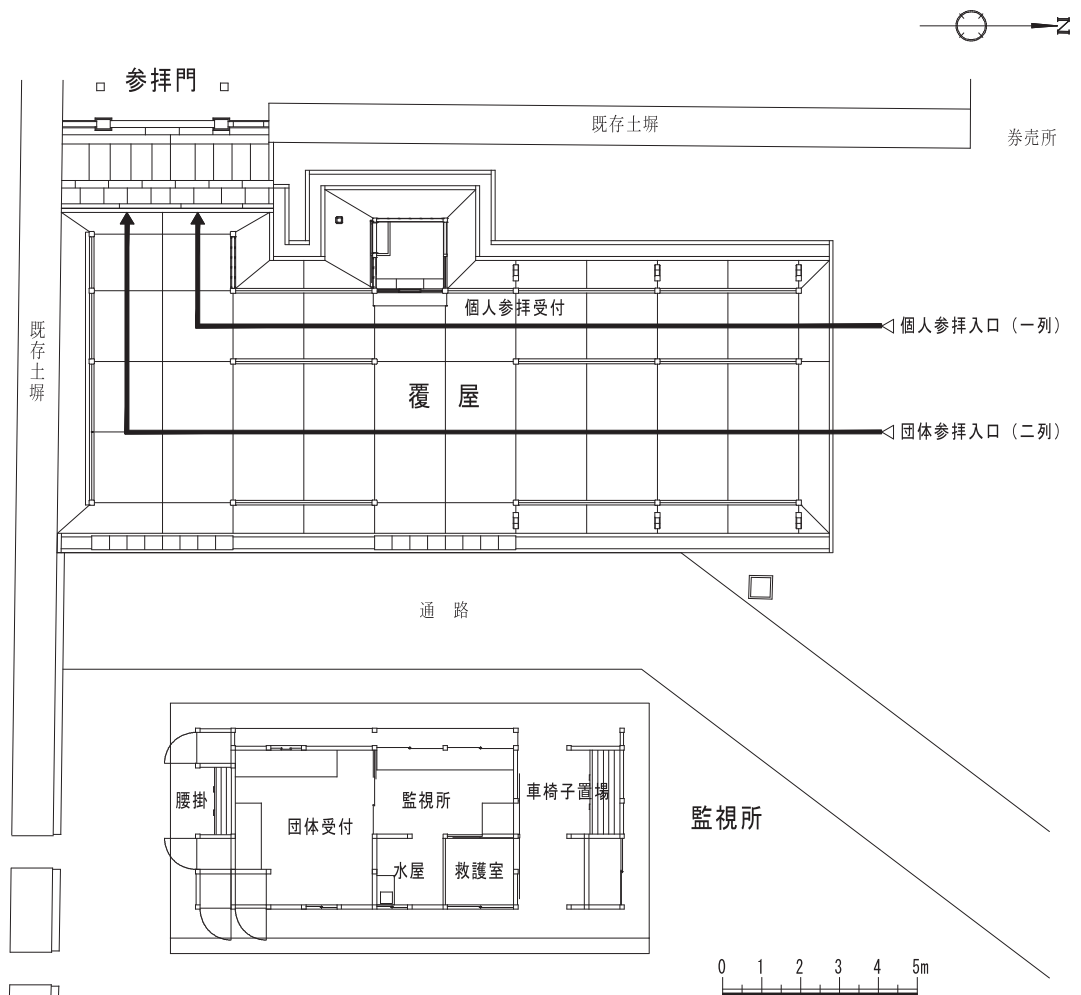


図1 配置平面図

1. 覆屋新築工事（工期：平成30年(2018)8月～令和元年(2019)8月）

構造形式 木造平屋建 入母屋造 一部寄棟造 銅板葺 棟瓦葺
土間モルタル刷毛引き仕上

規 模 桁行五間 18.18m 梁間三間 7.27m 棟高 4.09m

2. 参拝門修理工事（工期：平成30年(2018)8月～令和元年(2019)8月）

構造形式 一間一戸薬医門 木造 切妻造 棧瓦葺 左右袖壁及び北方潜戸付
規 模 桁行一間 3.03m 棟高 3.64m

3. 監視所新築工事（工期：令和2年(2020)4月～令和2年(2020)10月）

構造形式 木造平屋建 入母屋造 銅板葺 棟瓦葺
規 模 桁行 10.91m 梁間 4.55m 棟高 3.79m

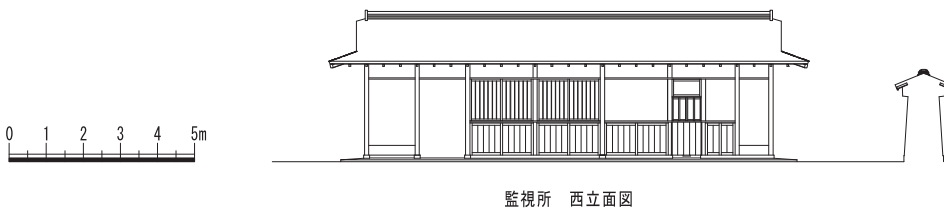
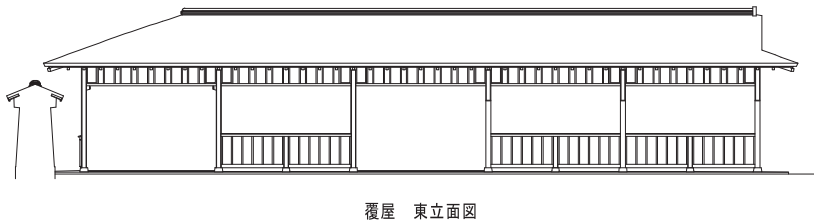
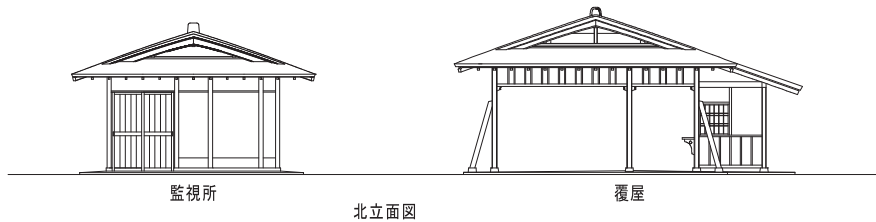


図2 立面図

2-1. 覆屋新築工事

混雑する参拝門前の空間、唐門南の券売所から参拝門までの約20mの間に、個人及び団体の参拝者の安全を確保し、また、雨天時や猛暑日等の参拝環境や誘導員の労働環境を改善することを目的として、覆屋（屋根付の渡り廊下）を計画した。

覆屋は、北面入母屋造り、西面寄棟造りの複廊形式で、妻入りで南北に棟を通し、参拝門前で矩折りとなっている。参拝門につながる通路であるため、参拝門を基準として割付け、配置や高さ、基準寸法、雨仕舞を決定した。覆屋内は化粧屋根裏の土間で、西一間を個人参拝者用、東二間を団体参拝者用の通路とし、参拝者の進路を誘導し、手すりも兼ねる腰壁を設け、動線を整理、可視化した。個人参拝者通路にはパンフレットを配布する受付が付属する。

参拝者にとっては、あくまで境内参観への導入部分の従属的な施設であるため、主参道からの景観や既存の周辺建物との調和に配慮し、壁の仕上げは、個人参拝受付を周囲の築地塀に色調を合わせ、腰壁等は桧板張とした。

基礎は、庭園整備用の散水車等の重量車両が通行することもあり、布基礎とし、床スラブは耐圧版とした。発掘調査で確認した植栽等による攪乱を利用しつつ、最大限掘削を抑え、建物の南3分の2の部分は近代まで機能していた参道を保存した。基礎の上に花崗岩の柱礎石を据え、その上部に柱を石場建てとした（図3・4）。

工事中に設置した仮設通路は、車椅子・ベビーカー使用者用復路や庭園整備のための散水車用通路として有用であったため、残して本設とした。



図3 覆屋小屋組の状況



図4 覆屋柱頭部の持送

2-2. 参拝門修理工事

これまでの参拝門は、雨及び落葉除けの白い仮設テントに東半分を覆われ、南脇には後補の監視所を併設しており、周辺の景観を損ねていた。覆屋の新築工事に伴い、これらの施設を撤去し、同時に部分修理工事を行った（図5）。覆屋新築工事に先行して屋根葺替工事をを行い、覆屋竣工に合わせて、袖壁及び南側土塀壁補修や銕金具補修を行い、覆屋との取り合い部分には共用の谷樋を新調した。屋根の腐朽材は取り替え、軸部の柱足元にも腐朽が見られたため、根継ぎを行い、根巻金物は新調した（図6・7）。



図5 参拝門西面全景（修理後）



図6 参拝門親柱の根継ぎ



図7 参拝門親柱の根巻金物

軒丸瓦には「京都大佛／小野井製」の刻印（図8・9）があり、隅留蓋の4種の獅子（図10）には篋書きで「瓦師 平右衛門」（図11）、「瓦平」（図12）、「瓦師 細工人 与吉作之」（図13）の銘があった。また、野地板には鉛筆書で「昭和廿七年四月七日」の記載があった。



図8 参拝門軒丸瓦の刻印



図9 参拝門軒丸瓦の刻印（拡大）



図10 参拝門南西隅留蓋の獅子



図11 参拝門隅留蓋の篋書き



図12 参拝門隅留蓋の篋書き



図13 参拝門隅留蓋の篋書き

2-3. 監視所新築工事

覆屋新築工事の際、参拝門の南脇に付属していた監視所を撤去したため、覆屋竣工後、覆屋東側の、通路を確保した位置に、規模や機能を拡大して建て替えを行った。敷地にあった浄蔵貴所墓（石造）は、参拝環境を改善するため、工事前に周囲の植栽とともに新しく整備を行っている鏡湖池南池周辺に移設した。

参拝者の安全を確保するため、参拝者の動向を監視するだけでなく、参拝者の状況に応じて、誘導員の増減等を制御できる、休憩所を兼ねた監視所とした。また、境内の別の場所にあった団体参拝者用の受付（添乗員等がまとめて入場札やパンフレットを受け取る場所）を併設することで、参拝門前に受付機能を集約して、寺の入場管理を一元化した。上記の機能に加え、急病の参拝者のための救護室、境内専用の車椅子置場、南の軒内にはトイレ利用者のための腰掛待合、西の軒内には職員のための外部カウンター及び収納を設けた。

監視所は覆屋と一体的な施設であるため、覆屋に正対した、平入りで南北棟の入母屋造りとし、覆屋のグリッドと意匠に合わせた。壁の仕上げも、外部は覆屋の個人参拝受付に合わせ、内部の居室はシナ合板張、物入は杉板張とした。

基礎は掘削を最小限とした布基礎とし、一部、撤去建物の基礎により攪乱された場所を選び、できる限り史跡や地下遺構の保存に配慮した構造とした。基礎の上に花崗岩の地覆石（巾150mm×成100mm）を据えた上に土台を設け、その上部に柱を土台建てとした（図14・15）。



図14 監視所地覆石据付状況



図15 監視所小屋組の状況

3. おわりに

鹿苑寺参拝通路整備事業は、平成29年(2017)11月の着手から約3年を要し、本年(2020)10月末の監視所の竣工で終わりを迎える。その間、コロナウイルスの猛威に曝されながらも、大きな影響も受けず、無事に工事を進めることができた。境内では同時に、金閣の屋根葺替工事や参道の舗装改修工事が始まり、コロナ禍の参拝客が少ない時にしかできない、終息後を見据えた対策が講じられている。一日も早く、多くの参拝客が安心・安全の中で集い、賑わう境内が戻ってくることを切に願っている。

この度、鹿苑寺の表玄関ともいえる参拝通路事業の設計を担当する貴重な機会をいただいたことに感謝し、また、本事業に携わられた関係者の皆様、様々な助言を下された皆様にこの場をお借りして感謝申し上げたい(図16)。



図16 監視所造立の関係者の皆様 (R2.8.4 監視所上棟式にて)

写真撮影 一般財団法人建築研究協会 北村誠工務店